

王昭君をめぐる中国人の苦悩：
観光資源における歴史の政治利用の一例
(国際シンポジウム「東アジアの観光動態に関する学
際的研究」特集論文)

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 公開日: 2018-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024963

王昭君をめぐる中国人の苦悩

——観光資源における歴史の政治利用の一例——

静岡大学 楊 海 英 (大野旭)

目 次

1 「民族団結のシンボル」を古代から見つける	99
2 「民族団結」の悩みを克服する	100
3 モンゴル人を殺して匈奴を愛す	101
4 発見された「王昭君の墓」と「友好」	103
5 洗脳教育の中の匈奴と王昭君	104
6 モンゴルの「悪い犬」は吠える	106
7 女に責任を押し付ける中国の男	107

紀元前33年、匈奴の呼韓邪单于^{こかんやぜんう}が漢王朝の皇帝の宮殿にいた女性、王昭君を妻の一人として迎えた。王昭君は匈奴の地で一人の男の子を生んだが、呼韓邪单于是紀元前31年に亡くなった。王昭君は更に新しい单于と再婚し、娘を二人もうけた。新しい单于是呼韓邪单于と別の夫人との間に生まれた子で、王昭君との結婚は遊牧民社会の婚姻のパターンの一つで、レヴィレート婚と呼ばれる。

歳月が過ぎ去った今日、匈奴をモンゴル人の祖先だとみなす中国人は王昭君を「民族団結のシンボル」と位置づけている。彼女の偉大さは、「野蛮な胡俗」であるレヴィレート婚の「屈辱」に耐えて、漢と匈奴＝中国人とモンゴル人との「平和と友好」をもたらしたことにあり、と絶賛されている。王昭君の名が冠された文化、「王昭君文化」は新しい時代の民族間関係を構築する手段だ、と謳歌されている。では、「王昭君文化」を通して内モンゴルの観光業を盛り上げようとする中国政府と中国人の思惑はどこにあるのか。なぜ、王昭君という観光資源を二千年も前の歴史の彼方から蘇らせたのかについて、検討してみよう。

1 「民族団結のシンボル」を古代から見つける

現代中国において、辺境の少数民族地域での観光が中国人に人気である。辺境の観光地には必ずといっていいほど少数民族の女性像か、女性を描いたポスターがある（写真1）。笑顔を浮かべ、杯や儀礼用の絹（khadagh）を両手にして中国人を歓迎するイメージが演出されている（楊 2017:190）。少数民族は「歌と踊りが上手」とか、「純朴にして酒飲み」と想像されているので、中国人観光客もあらかじめ創られたイメージを体験しようとやってくる。「歓迎」された中国人は少数民族の女性の歌と踊りを楽しみ、一種の性的な支配を夢想して満足する。文化人類学者のウラディーン・ボラクは、このようなジェンダーとセクシュアルティで以て具現化された民族間関係は、

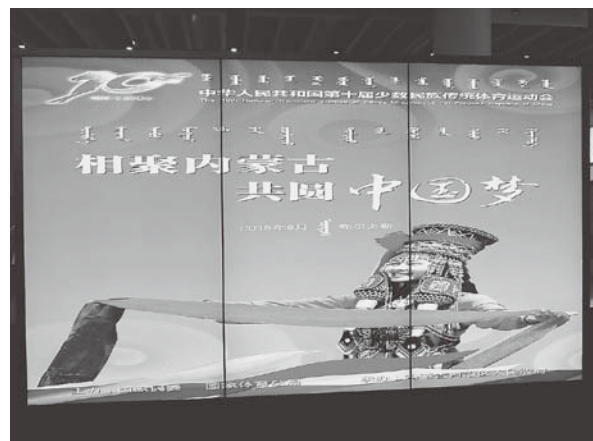


写真1 儀礼用の絹と酒杯を手にして中国人を歓迎するモンゴル人女性。中国人はどこに行っても、自分たちは熱烈歓迎されていると信じ込んでいる。

中国人男性対少数民族の女性という植民地的構造の代表で、「一種の力による不倫関係」である、と指摘している（Bulag 2002:63）。換言すれば、中国人は「男」として登場し、少数民族は「女」化されている。そして、少数民族の女性性を中国人¹は独占しようとしている。

近年、少し変化が生じている。中国人が夢想し、享受しようとする少数民族の女性性に歴史上の中国人女性加わってきた。少数民族の女性は無名で、特定の人物ではなかったのに対し、中国人の女性は歴史的に存在したとされる人たちである。チベットでは唐の文成公主、内モンゴル自治区では漢の王昭君が観光資源として利用されるようになった（写真2）。文成公主と王昭君は杯や儀礼用の絹を持ってその同胞の中国人を「歓迎」する列に加わっていないし、中国人観光客も彼女たちとの「不倫関係」を夢想していないかもしれないが、この二人には異例な政治的な地位が与えられている。「民族団結のシンボル」である。いや、それだけではない。チベットと南モンゴルを「我が国の固有の領土にして核心的な利益」に作り上げるのに「貢献」しただけでなく、「野蛮なチベット人と匈奴人＝モンゴル人」を「文明的な中国の婿」として迎え入れ、「中華民族の一員」に改編した「功臣」とされている。

王昭君も文成公主も、弱い中国から軍事的に強い匈奴とチベット（吐蕃）に嫁いだ人物で、その真実は中国の屈辱を物語る話である。しかし、中国はそのような不名誉な過去を再解釈して、漢王朝と唐が匈奴と吐蕃を屈服させた戦略だったと位置づけただけでなく、二人の女性も歳月を経て復活し、「民族団結のシンボル」との高位に据えられた。占領地のチベットと内モンゴルを観光する中国人も必ず資源化された二人の女性の銅像やゆかりの地とされる場所を訪れ、「我が国の過去の栄光」に思いを馳せる。本論文はこのような観光資源化された「民族団結のシンボル」とされる王昭君に焦点を当てる。内モンゴル自治区では現在、「王昭君文化」という言葉が流行り、「昭君文化節」という観光イベントも盛大に行われている。観光行事そのものではなく、王昭君をめぐる如何なる言説と再解釈が繰り返されてきたのか。中国人の思惑はどこにあり、モンゴル人はまたどんな風に反応したのか。このような政治的な言説が観光資源化するプロセスを整理することで、中国の辺境地帯における観光の一端について報告したい。

2 「民族団結」の悩みを克服する

中国と内陸アジア諸民族との関係を歴史的に遡ってみると、女性は一方向的に漢民族側から遊牧民へと贈与されてきた。古代では「和親」と呼ばれ、現代に入ってから「民族団結のシンボル」だと再解釈されている。こうした女性の贈与を中国は親族関係で以て位置づけてきた、と文化人類学者は指摘する。古代においては、中国人の女性を妻として迎えた遊牧民の指導者を中国皇帝の「婿」や「義理の息子」だと位置づけて、その軍事的進攻を防ごうとした。現代においては、過去の民族関係が「兄弟民族」だ



写真2 内モンゴル自治区フフホト市内の昭君飯店の前に立つ王昭君像。

¹ 本論文は中国人即ち漢民族である、との立場を取る。チベット人やモンゴル人は国籍上、中華人民共和国の国民となっているだけで、中国人（Chinese）ではない。「チベット族」や「モンゴル族」と表現すると、中国政府やその御用学者たちが標榜する「中華民族の一員」とされてしまい、政治的な概念になってしまう。中国の政治的な概念である「チベット族」や「モンゴル族」を用いずに、「チベット人」や「モンゴル人」と表現する。一般的に漢民族との名称は漢王朝に由来するとされている。文成公主が生きた唐は、その支配者の李一族は鮮卑系の人々で、それゆえに、唐も漢民族の王朝ではない、と歴史学界では常識となっている（森安 2007:139）。本論文は、多くの中国人が唐を「漢民族の最も華やかな過去」と妄想していることを尊重して「中国」と表現する。

と賛美され、民族問題を抑え込もうとする (Bulag 2002:67)。

しかし、こうした政治的な「親族関係」も実は中国人を悩ませてきた。それは、文化人類学上レヴィレート婚と呼ぶ習慣である。夫の死去した後、残された妻をその弟や、他の夫人から生まれた息子たちが娶ることである。儒教を信奉する中国人は、司馬遷の時代からレヴィレート婚を「野蛮人の風習」と呼び、屈辱として受け止めた。中国人女性を内陸アジアの遊牧民に贈与して一時的な平和を獲得しただろうが、「和親」には常にレヴィレート婚の倫理上の問題がつきまとっていた (Bulag 2002:68)。

自らの女性を他者に嫁がせた歴史上の物語は、中国人が決して「強い男」を演じて来なかった事実を意味している。それでも、「和親」を「民族団結のシンボル」に改編するレトリックには、一種の「自己女性化」(self-feminization)が見える。「自己女性化した中国」対「男性化した内陸アジアの遊牧民」という構図であり、いわゆる「民族団結」もジェンダー化した概念にすぎない (Bulag 2002:64)。

それだけではない。中国は過去には「和親」を通して匈奴と吐蕃を「従属」させたとして自己満足していたし、現代においては更に国家主権を主張するように一歩進んだ。吐蕃も匈奴も中国人女性をもらった為に国家主権を失い、中国の一部と解釈されたのである。紀元前から登場した匈奴と現代のモンゴル人が遺伝学的にも文化的にも直接的な関係がどれほどあるかも未確認であるにもかかわらず、漢王朝対匈奴の「和親」をそのまま中国対モンゴルの国家間・民族間関係に当てはめようとする。ここに、中国による「自己女性化」の目的がある (Bulag 2002:65)。かつての「和親」から「民族団結のシンボル」を発見した中国人の努力は茶番劇のように見えるが、その行為に潜むイデオロギーの政治力を無視することはできない。それには、「文明的な中国」が「野蛮な少数民族」を同化させようとする政治力が包含されている (Bulag 2002:66)。

以上、文化人類学者ボラクの分析と見解を紹介してきたが、私は小論で王昭君をめぐる中国人のさまざまな言説を年代順に整理し、その背景について分析してみたい。その上で、中国人の努力をモンゴル人は如何に理解しているかを示しておきたい。観光資源となりつつある「王昭君」の背後の政治の力関係こそが中国人とモンゴル人との民族関係を具現しているとの結論を導きたい。

3 モンゴル人を殺して匈奴を愛す

漢王朝の「和親」の相手、中国の「民族団結の対象」は匈奴である。この匈奴に関する最も有名な専門家が林幹 (1916~) とされている。中国が自身と匈奴との関係史を語る際には、ほとんど林幹の見解に沿うようにしてきたので、彼がどういう人物であるかに注目する必要がある。

少し、横道に入る。1966年から中国文化大革命が勃発すると、内モンゴル自治区では大規模なジェノサイドが発動された。政府の公式見解によると、当時、人口約130万人のモンゴル人に対し、中国政府は34万人を逮捕し、27,900人が殺害され、12万人に身体障がいが残った。モンゴル人たちは「民族分裂的な活動」を行った内モンゴル人民革命党員や「日本のスパイ」とされて、虐殺されたのである (楊 2009:1)。内モンゴル人民革命党はコミンテルンの支持で1925年に成立した民族主義の政党である。日本が内モンゴルに進出していた時期になると、同党の党員の多くは日本の力を借りて中国から独立しようと模索した。日本が撤退した後は、同胞のモンゴル人民共和国との統一合併を目指した。同胞との統一は、1945年2月に結ばれた「ヤルタ協定」の密約によって葬られた為、内モンゴルのモンゴル人は仕方なく中国人との共生を選ばざるを得なかった。

中国政府から有名無実の区域自治を与えられた内モンゴルであるが、1960年代になって、既に解散させられていた内モンゴル人民革命党の「罪」が再発見された。発見したのは他でもない、林幹である。文化大革命研究家のアルタンデレヘイによると、林幹は1957年に内モンゴル大学が創建された際に、中国内地から派遣されてきた。彼は歴史を調べようとして自治区の档案を読みあさり、モンゴル人の「過去の民族分裂的活動」を見つけた。彼は早速、自らの「発見」を情報機関に報告した。自治区の情報機

関は、モンゴル人高官からなる「内モンゴル人民革命党」は解散せずに地下に潜伏して活動していると判断した。ここから、大勢のモンゴル人が逮捕され、殺戮されていったのである（阿拉騰徳力海 2008:25-26）。このように、林幹はモンゴル人を敵視し、モンゴル人の民族自決運動を分裂活動だと理解している人物であることが分かる。当然、彼はモンゴル人の「祖先」とされる匈奴に憎しみを抱いている。匈奴の一部が漢王朝に服従すれば、それは「愛国行為」で、漢王朝と敵対する歴史は「民族分裂的活動」だ、と政治的な色眼鏡で古代史を解釈している。

林幹は1977年に『匈奴史論文選集』を編集し、内モンゴル自治区革命委員会から出版された。「革命委員会」とは、当時の共産党政府そのものである。1977年の時点で、モンゴル人大量虐殺は一段落し、文化大革命も終息が宣言されていた。しかし、自治区の情勢は極めて不安定で、モンゴル人の不満も頂点に達していた。モンゴル人の自治区は三分割され、東の三分の一は中国人の東北三省に割譲され、西の三分の一は甘粛省と寧夏回族自治区に譲渡され、残りの三分の一でも軍事管制が敷かれていた。中国の自治区とされた為にジェノサイドの対象とされ、独立国となっていれば、完全に別の運命を辿っていた、とモンゴル人は覚醒していた。こうした状況に危機感を抱いた愛国者の林幹が、モンゴル高原に対する主権と、モンゴル人との「民族団結」を匈奴の時代に遡って強調する必要が生じたのではないか。学術研究がまだ全面的に解禁されていなかった時期に、革命委員会政府から匈奴に関する論文集が出された目的と意義はどこにあるのではなかろうか。

林幹はまず「匈奴族は我が国の古代の少数民族の一つだ」とし、紀元前の3世紀頃から登場し、5世紀頃まで活躍し、「中国史と世界史に巨大な影響を与えた」としている（林幹 1977:1）。いうまでもなく、「我が国の古代の少数民族」との表現の重点は、「我が国」という帰属権にある。世界史に影響を与えたのも、「我が国」だといわんとしている。林幹が編集した論文集には日本の白鳥庫吉やイギリスのイエッツ（Perceval W. Yetts）のような「ブルジョアジーや帝国主義の学者」の著作も収録されており、それらの論文の共通点について、以下のように総括している。

まず、階級闘争観に依拠していない点である。匈奴と漢王朝との戦争においても、匈奴貴族と平民を区別しなければならない。次に、漢と匈奴との関係を分析する際に、大漢族主義と民族主義的情緒に陥っていることがある。和親政策を評価せずに、匈奴に嫁いだ漢の公主を「犠牲品」や「贈答品」と見るのは間違っている、という（林幹 1977:7）。林幹は、匈奴は中国の戦国時代によく原始社会から奴隷社会に移行し、搾取階級の貴族が出現した、と進化論に即して分析している。そして、「搾取階級の貴族」が漢王朝に対する戦争を主導したと語る（林幹 1977:236, 266-277）。こうした言説はまず、匈奴という他の民族と国家を自身の年号で語っていることに特徴がある。次に、匈奴が「原始社会」から奴隷制社会に移行しつつあるのに対し、漢王朝は封建社会に入っているため、後者の方が先進的だ、というマルクス流発展段階論を展開している。

林幹は論文集に複数の作品を掲載し、そのうちの 하나가「論昭君出塞」である。「王昭君は紀元前33年に出塞した」、と林は語る。漢王朝は成立した当初から匈奴と緊張関係にあり、国力が遥かに弱かったので、和親政策を取らざるを得なかった。のちに武帝が即位すると、情勢は逆転し、漢王朝が成立して以来150年間にわたって続いた敵対関係が平和になった。王昭君はまさにこのような状況下で、「漢と匈奴が結んだ平和と団結、友好関係を更に強固にするために出塞した」という²（林幹 1977:290-295）。このように林幹は大漢族主義を批判するポーズを取りながら、自身も漢中心の史観に立ち、漢を上位に置いている。

漢王朝が内陸アジアの遊牧民に嫁がせた公主の中には、現地の生活に馴染めずに早く夭折した者もいた。烏孫王のところに行った細君がその一例である。林幹に言わせると、細君は貴族即ち搾取階級の出身だったから、苦悩から飛躍できなかった。一方の王昭君は被搾取階級の農民の出なので、匈奴で自由

² 林幹は1963年3月に『内モンゴル日報』に王昭君に関する文を載せて、漢と匈奴との友好を称賛したという（林幹 1977:17）。

奔放に生きた。普通的女性だからこそ、「祖国から与えられた政治的な任務、すなわち漢と匈奴との民族団結と友好関係の構築をみごとに完成させた」。そして、林幹もレヴィレート婚という「胡俗」は侮蔑的だったが、王昭君はそれを克服できたから、「民族団結の素晴らしい模範だ」という（林幹 1977:294-298）。

中国人の歴史観に対し、日本の研究者は別の見方を示す。そもそも現在の「民族」の概念で以て古代の歴史を語るには限界があり、匈奴が打ち立てたのは独自の遊牧国家で、漢王朝の属国ではないし、「中国の古代少数民族」でもないとする。漢王朝が成立した最初の頃は、漢高祖も匈奴の単于と「兄弟」と称せざるを得なかった。「中国は中華思想の国である。その中国にとって、たとえ形式的には漢皇帝が兄、匈奴単于が弟となっているとはいえ、これまで戎狄として蔑んでいた匈奴を対等な相手として認めなければならないことは、屈辱以上の何ものでもない」。両国の外交的なやりとり、たとえば国書の形式や言葉遣いを見ても、実際は匈奴の方が上だった。実力の面で強かった匈奴と対等な関係を構築したかのような概念操作は、「中華思想を標榜する漢の哀れな見栄の表れであった」、と指摘している（澤田 1996:27-28）。皇室の公主を含めた中国人の女性を異民族に嫁がせた行為も一種の懐柔政策にすぎない。異民族が強かった時には皇帝直系の娘を、中国が優位に立つと、皇室以外の女性を選ばれた。王昭君も当然、皇帝家の出身ではなかったのも、漢と匈奴の関係が逆転していた時期の産物である（澤田 1996:66, 72-74）。

日本の考古学者の林俊雄は以下のように論じる。匈奴が建設したのは遊牧帝国で、漢との関係もユーラシア東部における大国同士の国際関係であるという（林 2007:198-200）。紀元前33年に王昭君をもらおうとして呼韓邪単于が漢の朝廷を訪れた際に、どのように彼を迎えるかをめぐり、皇帝と臣下たちの中で議論があった。最終的には、匈奴は漢の曆を使わない敵国であるので、臣下の礼ではなく客分の礼で応対し、呼韓邪単于が藩臣と称しても、漢は謙虚な気持ちを見せて臣下扱いせず、諸侯王よりも上に置く待遇をした、とする漢籍の記録を見るのが妥当だ、としている。王昭君が嫁いだあとの両国関係は順調だった（林 2007:269, 275）。

以上のように、林幹に代表される中国人は漢が先進的で、匈奴が立ち遅れているという発展段階論に立ち、史料を無視して無原則に匈奴を漢の属国だと位置づける。属国である以上、匈奴も自然に「我が国の古代の少数民族」となり、その国家も「地方政権」に格下げとなる。いわゆる歴史学者だけでなく、考古学者の田広金も「匈奴は我が国北方の古代民族」だとの立場で出土品を分析する（田広金 郭素新 2005:415, 448）。「匈奴は我が国だけでなく、世界史にも大きな影響を与えた」としながらも、実際は漢籍のみに頼り、中国北部の遺跡にだけ注目しているので、「世界史における匈奴」に関する考古学的成果だとは言い難い。こうした立論は更に「匈奴の子孫たるモンゴル」にも適用され、現代のモンゴル人対策に使われる。

4 発見された「王昭君の墓」と「友好」

匈奴で生涯を終えた王昭君だが、その墓とされる存在は南モンゴルに複数ある。最も有名なものが、自治区の首府フフホト市の南郊にある「昭君墓」である。もう一つは、私の故郷、オルドス高原の東部、ダラト旗昭君墳公社にある。「昭君墳公社」という地名も、地元の「昭君墳」という古墳から名づけられたものである。ある中国人は、複数ある中でもフフホト市郊外のものが「本物」で、オルドスにあるのは「人民から幅広く愛されていた象徴の一つ」だとしている（候広峰 2001:136）。

モンゴル人はフフホト市郊外にある「昭君墓」をテムールホラホ（Temür Khurakhu）と呼んでいた。「鉄の集会所」との意である。このテムールホラホを「王昭君の墓」だと正式に追認するのに、大きな力を果たしたのもまた林幹である。彼は1979年に『昭君与昭君墓』というパンフレットを編集し、テムールホラホが王昭君の墓だと力説した。

林幹は、唐の文献『通典』に既に「単于府に王昭君の墓がある」との記述に注目し、宋代では「青塚」と呼ぶように変化し、元朝にも記述はあったと整理している。王昭君の墓が内モンゴルにある理由とし

て、以下の四点を示している。一、王昭君の出塞で漢と匈奴の両民族の団結と友好が実現したので、人民が彼女の記念に墓を建てた。二、内モンゴルは彼女の夫君、呼韓邪単于の放牧地だった。三、王昭君の墓から1954年に「単于和親」と刻字された漢の時代の瓦が出土した。四、彼女の墓とされるものは各地にあるが、フフホト市郊外のものが最も有名だ（林幹 1979:68-69）。

林幹は同じパンフレットの中で、繰り返し自説を説く。「匈奴はあくまでも我が国の古代の多民族の中の一つの遊牧部族で」、「原始社会から奴隷制への過渡期に歴史の表舞台に出た」、と極力、匈奴が「発展段階上において立ち遅れていた」と力説する。「父が死んで、その継母を息子たちが娶る」婚姻関係が残っているのも、「原始乱婚制の残滓で、称賛できない」。そのような「野蛮」なレヴィレート婚の風習を王昭君が克服するには、大きな決心が必要だったに違いない、と推測している。「彼女は民族間関係を大切にしよう」として、この「野蛮な風習」を受け入れたらう。そして、匈奴は自らを「引弓の国」と呼び、漢とは長城を境にしていたとの記載についても、「その国も、あくまでも中国という国家内の国だ」と強弁している（林幹 1979:9, 73-79）。このように、林幹は事実の再構築よりも、現代中国の領域と民族間関係に関する政策のために、自由自在に漢籍を再解釈して「根拠」を提示しようとしている。林幹にもし、彼自身の密告でモンゴル人が大量虐殺されてしまったという良心の呵責があるとすれば、そのためにことあるごとに「民族間関係の大切さ」を強調していたかもしれない。しかし、「祖国の統一」を優先し、単于と漢との和親に反対した「匈奴貴族」を批判する林幹に「良心」があったとは考えられない。

林幹の不人気に気付いた候広峰は別の表現を使った。彼は、王昭君をめぐる中国人中心の言説を批判する姿勢を取り、匈奴に一定の理解を示し、漢と匈奴を一体化した「漢匈文化」すなわち「昭君文化」と提唱した。「昭君文化とは、漢匈民族間関係を示す文化」で、匈奴も「中華民族の一員」で、両民族が団結した結晶が、「昭君墓」だという（候広峰 2001:127, 133, 136, 152）。この候広峰は1962年から政府系の『内モンゴル日報』で王昭君を取りあげたエッセイを發表し、1991年頃から「昭君文化」という概念を打ち出していた。フフホト市政府も彼の仮説を利用し、2000年から以前の民間の「風俗習慣」だった「昭君廟会」を政府が運営する「昭君文化節」に改名した。「昭君文化は中華民族の智慧の現れで、民族間関係を処理する新しい概念だ」と位置づけられた（候広峰 2001:148-152）。

候広峰がこのような「寛大」で、リベラルな見方を示しているのは何故だろうか。儒教の倫理を神聖視する中国人はレヴィレート婚を「原始社会の残滓」だと見なすが、現実的には中国北部の山西省や陝西省でも「兄嫂婚」として実践されてきた。北方の中国人もレヴィレート婚を実施しているのを彼らと匈奴やモンゴルとの混血に原因を求める見方もある。内モンゴルに侵入して数十年経ち、現地のモンゴル人と仲良くしたいと願う人もいる。候広峰のような中国人も「匈奴が主張する国も、我が国の中の小国」との前提で（候広峰 2001:119）、民族間関係の「友好」を理想としているだけである。

5 洗脳教育の中の匈奴と王昭君

林幹のような人物の見解は当然、中国の歴史教育にも反映される。例えば、私が中学の時に学んだ『中国歴史』（初級中学、1979年）は以下のように匈奴について触れている（p75）。

紀元前200年、匈奴貴族は騎兵を連れて南下し、晋陽を攻めた。漢の高祖は32万人の軍を率いて迎え撃ったが、かえって平城の白登山に包囲された。七昼夜のあとようやく包囲から解かれた。高祖は匈奴との関係を緩和しようとして和親政策を取り、皇室の娘を単于に嫁がせ、毎年大量のシルクや穀物を提供した。しかし、匈奴は相変わらず漢の北部を進攻し、人民の生命と財産に重大な損害をもたらした。

上の記述では、漢の高祖が何故、匈奴に負けたかについては触れていないが、補助教材の『中学基礎知識手冊 歴史』では、「漢の高祖には匈奴を撃退する力がなかった」、と明確に記し、匈奴は完全に「外国からの侵略者」として描かれている（p21）。当時、歴史を教えていた中国人の先生は、「劉邦は金で匈奴に賄賂を贈り、包囲網を解いてもらった。今でいう裏口外交だ」、と分析していたのを私は記憶し、教科書に書きこんでいた。その教科書は今も私の手元にある。ただ、その教科書は更に316年に西晋が滅び、その後、五胡十六国時代に突入すると、匈奴人が複数の国家を建立していた歴史にも触れていた（p112）。そのうちの夏王朝がオルドスにあったことから、身近に歴史の興亡を感じながら、匈奴の方が中国人の漢王朝よりも長かったのではないかと気づいていた。オルドスと隣接の陝西省や山西省では、モンゴル人は匈奴の子孫だと自他ともに認めていたので（楊 2003:327）、子供ながらも長い歴史を誇りに感じていた。

中国全土で使用される教科書では漢の惨敗と匈奴の勝利を避けようとしているが、内モンゴル自治区で発行されている地域の補助教材『初級中学課本・試用本 内蒙古歴史』（1988）では、匈奴が今日の内モンゴルのどの地域で、如何に活動していたかについて、詳しく述べている。その上で、王昭君については以下のように取り上げている（p20-21）。

紀元前33年、漢の皇帝は匈奴を籠絡するために、宮中の妃の一人の王嬙を匈奴の呼韓邪単于に嫁がせた。……王嬙こそが歴史上、有名な王昭君である。史書の記述によると、彼女は自ら進んで匈奴の単于に嫁いだもので、諸民族同士の意思疎通が不足していた古代において、彼女の行動は簡単なことではない。王昭君のような漢の娘が、我が国の古代の諸民族の人民同士の和睦のために貢献した。「昭君出塞」の物語は、今でも民族団結の良きエピソードとして伝えられている。

このように、王昭君の「事績」を「民族団結」の「良きエピソード」として位置づけてから、フフホト市郊外にある「王昭君の墓」の写真に掲載している。学生たちが身近に歴史を感じとることができるような筆致である。

林幹のような御用学者の言説は政府に採用され、王昭君墓もますます整備されて、内モンゴル自治区の「有名な観光地」となった。学校教育の場だけでなく、市民社会内の「民族団結のシンボル」としての王昭君墓が現れた。例えば、中国全国の省や自治区を紹介する叢書の一冊、『内蒙古風情』は次のように王昭君墓を紹介している（烏恩主編 1987:87）。

王昭君が塞北に来てからは漢人の習俗を改め、完全に遊牧生活を送った。彼女は天幕に住み、家畜の肉を食べて、乳を飲み、快適な日々を過ごした。彼女は大局的な視点に立ち、小さなことに拘らずに匈奴の風俗を尊重し、侮辱に耐えて二代の単于の夫人となった。……ここ内モンゴル草原は彼女の第二の故郷である。

このように、中国人は「家畜の肉を食べ、乳を飲む」ことを一段低い生活だと理解している。彼女の匈奴での暮らしを「快適」だった想像しながらも、レヴィレート婚の実践を「侮辱に耐えた」と断じている。実際の王昭君の心情は誰も知らないが、レヴィレート婚は中国人を二千年以上にわたって悩ませ続けて来たことは事実である。中国人は今日においても、この屈辱に忍耐して、モンゴルとの「民族団結」という夢について語らなければならないところに、彼らの悲劇性が認められよう。

6 モンゴルの「悪い犬」は吠える

中国政府と中国人が肝いりで紀元前の女性を蘇らせて、今日の「民族団結のシンボル」に作り上げようとする運動に対し、モンゴル人は強い違和感を覚えてきた。内モンゴル社会科学院民族研究所に務め、自他ともに「体制外の知識人」として認められてきたムーノハイ（茂敖海）は1980年に「少数民族を描いた歴史劇の思想的傾向に関する試論」という論文を発表し、中国人が信奉する「王昭君神話」について反論した³（茂敖海 1980:56-73）。ムーノハイとは、モンゴル語で「悪い犬」との意味である。彼は次のように「吠えた」。

中国の著名な作家の郭沫若は1959年に『蔡文姫』を、俞伯魏は1963年に『奢香夫人』⁴を、曹禺は1978年に『王昭君』をそれぞれ創作した（写真3、4）。歴史上の少数民族の指導者に嫁いだ中国人女性を描いたこの「三大劇」には一つの共通した思想的な傾向が見られる。それは、民族問題を考える際に、民族間の平等を無視してひたすら団結のみを強調していることである。平等なくして団結はありえない、とムーノハイは主張する（茂敖海 1980:56-57）。

郭沫若の「蔡文姫」は完全にフィクションである。蔡文姫を郭沫若は匈奴のモドン（冒頓）単于に嫁がせ、一男一女を生ませる。後に中国で曹操が強くなると、蔡文姫を無理矢理離婚させて、長安に「回帰」させる、というストーリーである。これに対し、ムーノハイは指摘する（茂敖海 1980:57-59）。

郭沫若は親漢派の人物をヒーローに作り上げ、民族主義的な人物を醜悪に描いている。古代は無産階級専政の社会主義ではなく、封建的搾取階級が支配する時代であり、民族間の抑圧が存在していた。そのような民族間の抑圧に対し、自民族の利益を守ろうとする民族主義者を非難する必要はあるのだろうか。……

蔡文姫が生んだ一男一女は匈奴人であり、匈奴はその故郷である。なのに、何故、漢王朝に「回帰」しなければならないのか。

フィクションであるとはいえ、「曹操は民族団結を強化したどころか、蔡文姫と単于との結婚生活を破壊した人物とされてしまった」、とムーノハイは批判する。『王昭君』の場合はもっとひどい、とムーノハイの筆鋒は鋭い（茂敖海 1980:63-66）。

第一、著者の曹禺は漢王朝が匈奴を征服する行為を称賛し、民族間の抑圧を正統化している。王昭君も漢の皇帝に忠実な奴隷で、匈奴を指揮する人物に作り上げているのも、史実に違反している。

第二、王昭君と結婚した匈奴の呼韓邪は決して評価すべき人物ではない。彼は匈奴で反乱を起こし、



写真3 中国の著名な劇作家曹禺の脚本をもとに作られた絵本『王昭君』。

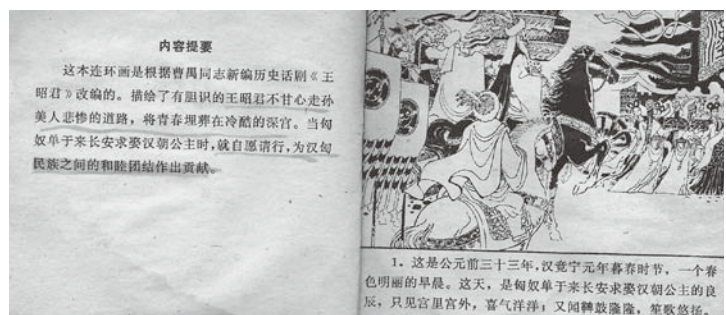


写真4 民族団結のシンボルとして描かれている王昭君。

³ ムーノハイは「体制外の知識人」と称し、実質的には反体制派だったために、彼の著作も中国では公開出版できない。四冊からなる『民族問題研究』は謄写版で、他の著書は香港から出版されている。

⁴ 『奢香夫人』は明の朱元璋の時代に西南少数民族のリーダーに嫁いだとされる女性を主人公にしている。

失敗して漢に帰順した裏切り者である。曹禺はこのような裏切り者を英雄に仕立て上げ、逆に呼韓邪と王昭君との結婚に反対した匈奴人を民族主義者だと貶している。漢に帰順すれば良い人で、匈奴の独自性を主張すれば悪人、という見方は漢族の支配のみを正統化しようとする大漢族主義である。

第三、漢と匈奴を平等に扱っていない。まるで匈奴を漢の家畜のように描く劇作家の見解は民族間の平等精神に反する。

ムーノハイは古の匈奴と漢との平等を主張することで、現代におけるモンゴル人と中国人との民族間関係に照射しようとしている。民族地域自治における最も重要なことは、民族間の平等である、と少数民族側は求める。これに対し、中国人は平等を無視し、中国人が支配者となる前提での「団結」を強調する。内モンゴル自治区の場合、文化大革命中に大量虐殺を経験した後、以前よりも平等が否定され、「団結」のみが強制されるようになっていた。「団結」とは無原則に中国人と「仲良くする」ことで、中国人に抑圧され、虐殺されて不平不満を唱えると、すぐさま「団結を破壊した」と封じ込められる(楊 2009:166)。ムーノハイだけでなく、モンゴル人をはじめとする少数民族側が「平等の原則を前提とした団結」の実現を要求する理由はここにある。中国人が思い描く「王昭君」は平等性に欠き、中国人中心、中華思想を前面に押し出した仮想劇であるので、モンゴル人に歓迎されないのである。

7 女に責任を押し付ける中国の男

漢王朝の王昭君や唐の文成公主に代表されるような、中国から内陸アジアの遊牧民の指導者たちに嫁いだ人物たちは、いわばその「女性性」を一種の性的な資源として他者に提供しただけである。それでも、匈奴や吐蕃などは中国への侵攻を中止することはなかった。中国は「自身の義理の息子や姉妹の夫」による侵略に苦しめられてきたのである(Bulag 2002:68,70)。しかし、中国人は二千年にわたってその屈辱に耐えて、今やその不名誉な過去が「我が国の核心的利益や主権」の根拠となった。それだけではない。歴史に対する再解釈は紀元前の秦漢時代にまで遡り、中国共産党が現在進める「民族の区域自治政策」の源流は秦の始皇帝と漢の武帝に原型を求めようとする。和親政策も「地方自治」の現れで、匈奴や吐蕃の法も「少数民族の慣習法」に過ぎないとして(劉広安 2009:13-14)、苦手になっていたレヴィレート婚の難関を突破してみせた。

中国人も平和を希求してきただろう。文豪魯迅はかつて1934年12月に次のように書いた(魯迅 1973:170)。

王昭君が出塞しただけで漢王朝に安寧をもたらしたとか。……男権社会において、女性にそれほど巨大な力があつたとは思えない。興亡の責任も男が取らなければならない。しかし、今までの男の書き手たちははたいてい、その敗北の責任をいつも女性に押し付けようとする。まったく意気地のない男たちだ。

魯迅の指摘は文化人類学者の見方と一致する。中国は自己を女性化し、男性化した内陸アジアの遊牧民との和親政策を謳歌し、「野蛮なレヴィレート婚」を克服して、「民族団結」を実現させようとしている。かくして、王昭君も「民族団結のシンボル」に祭りあげられたのである。

[付記]本稿は、科研費基盤研究(B)「新疆ウイグル自治区、内蒙古自治区の観光動態に関する総合研究」(2014~2017年度、研究代表:山田敦之・大阪成蹊短期大学教授)と、科研費基盤研究(A)「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(2015~2017年度、研究代表:塚田誠之・国立民族学博物館教授)の成果である。記して関係者に感謝申しあげる。

参考文献

澤田勲

1996『匈奴—古代遊牧国家の興亡』東方書店。

林俊雄

2007『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社。

森安孝夫

2007『シルクロードと唐帝国』講談社。

楊海英

2003「漢族がまつるモンゴルの聖地」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態』風響社、293-341。

2009『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上) 岩波書店。

2017「中国が政治利用するチンギス・ハーン—〈中華民族の英雄〉と資源化するモンゴルの歴史と文化」『国立民族学博物館調査報告』142:179-193。

Bulag, E. Uradyn

2002 *The Mongols at China's Edge, History and the Politics of National Unity*. Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

阿拉騰德力海

2008『内蒙古挖肅実録』(続編) 私家版。

初級中学課本

1979『中国歴史』(初級中学、第一冊) 人民教育出版社。

初級中学課本・試用本

1988『内蒙古歴史』内蒙古教育出版社。

林幹

1977『匈奴史論文選集』内蒙古革命委員会・蒙古語言文学歴史研究所歴史研究室。

劉広安

2009『中国古代民族自治研究』中央民族大学出版社。

魯迅

1972 (1934)「阿金」『且介亭雜文』人民文学出版社。

茂敖海

1980「試論幾出民族歴史劇的思想傾向」内蒙古社会科学院民族研究室編『民族問題研究』第三輯:56-73。

田広金 郭素新

2005『早期中国文明 北方文化與匈奴文明』江蘇教育出版社。

中学基礎知識手冊

1979『歴史』(中学基礎知識手冊) 上海教育出版社。

烏恩主編

1987『内蒙古風情』人民日報出版社。